

擦文文化の刻印記号

宇田川 洋

1 はじめに

北海道独自の文化ともいえる擦文文化に関する研究は、とくに集落址に関する研究分野が進んでいるほうであると言えるであろう。それは、北海道のとくに東北部に顕著な、堅穴状窪みが今も多く残存しているといったことから、遺跡の確認と発掘調査が比較的容易であるという点にも起因しているであろう。そして堅穴住居址から出土する擦文土器の量も急激に増加しているのが現状である。たとえば、藤本強氏の常呂川下流域における擦文土器のまとめ¹⁾によると、ある程度復元できて計測値が得られたり、諸要素の分析がなし得たものは、現在まで大型鉢形土器117、中型鉢形土器97、小型鉢形土器37、坏形土器49、壺形土器6の合計306になるといわれる。これらはほぼ1/4世紀に当る年月の発掘成果であるが、今後の調査によって増加するのは当然のことである。しかし、ここで紹介するように擦文土器の底部の底面に焼成前に刻まれた記号状あるいは時には絵画状のもの(“刻印記号”と呼んでおく)が残されているのは、306個体のうちわずか2個体である。このことはその特殊な記号を刻むという意識が、地域的なことに関係していることを意味している。本論ではその地域的特殊性の問題を考察する前の段階として、北海道における集成をまず行っておきたいと考える。

2 刻印記号の研究史

この記号について最初に注意を払ったのは新岡武彦であろう。「北海道“古代文字”研究並に沿革、環状石籬に及ぶ」(『北海道帝国大学新聞』58・59, 1930, 『樺太・北海道の古文化』2, 北海道出版企画センター, 1977所収)で、土器や石につけられている記号がアイヌのエカシシロシ(ekasi-shiroshi 祖印)と関係があることを指摘し、さらに古代文字とも関係を有すると述べた。その論文の中では、五十嵐鉄・遠星北斗・平光吾一・室谷精四郎・西田彰三等の意見も紹介している。

新岡はさらに「本道石器時代最後の遺物」(『蝦夷往来』1, 1931)の中で“イトッパ土器”と称して、アイヌ土俗品に多いイトッパ(itokpa 印)文様を注目しているが、それは「北海道古代文字論」(『北海タイムス』昭和6年2月18日記事, 『樺太・北海道の古文化』2所収)で、よりくわしく取り上げられている。その中で土器については、ここで扱う刻印記号を含む“有記号土器”とされ、

その記号はアイヌのエカシシロシと同種のものと考えられ、「イカシシロシもその源は模様であり古くから記号としてあったものではないが、土器の底部に刻されたりするのはその所有の意味をあらはす」ものであることを指摘している。ちなみにこの新岡の意見は、平光吾一²⁾のいう“イトッパ文様”のある土器を発展させたものである。平光は、オホーツク土器の短刻線（舟窩状刻文とその変形）をイトッパとみなしたので、河野広道の指摘³⁾のようにそれは不適當である。

次いで杉山寿栄男は『北の工芸』（1934）の中で「アイヌ印の起源」を考察している。その中でイトッパとシロシ・イナウのイトッパ・ヒゲベラの印・我国の印と紋章・我が上古の徽標に類するもの、について述べている。最後の項目の部分で、石器時代の銚頭や自然石に見られる記号そして土器の底部に刻まれた記号などについて言及している。本論でも紹介する小樽市蘭島駅付近出土の例（第3図99）を図示して、以下のように言う。“アイヌ印の如きもの”として「文様としては余りにも簡単である為め印と見られて居るものである。これ等は祝部土器の各種に見られる印と殆ど同一形式のもとに発達したものと推考できる。従来この種の印は窯印などと呼ばれて居るものであるが、……この象徴的印のものには何等か宗教的意味の存在があるのではないかと窺れるものである。」と。

木村英明・斎藤傑は「奥尻町青苗貝塚出土の浅鉢の底について」（『黒耀石』7、北海道青年考古学協議会連絡紙、1959）を発表している。底部に刻まれた刻印記号の資料紹介であるが、考察は加えられていない。

筆者もこの記号については注意を向けていたところである。『北海道の考古学2』（北海道出版企画センター、1977）で、エカシ・イトッパ（ekashi-itokpa 祖印）に類似した記号として奥尻町青苗貝塚出土の木村・斎藤紹介のものを含めて拓影図を載せておいた。渡辺仁のいうシネ・イトッパ（shine-itokpa）集団⁴⁾すなわち同一の祖印（エカシ・イトッパ）をもった父系の血縁集団と関連性があるようなニュアンスで簡単に触れておいた。

その後、発掘資料が徐々に増加し、近年に至っているが、宮塚義人は小平町高砂遺跡の調査の経験からこの刻印記号についてまとめている（「小平町高砂遺跡の調査」『考古学ジャーナル』213、1983）。その中ではとくに分布の地域性に注目して、その日本海側に偏在する傾向を以下のように述べた。「日本海側と太平洋岸、オホーツク海沿岸の擦文文化に差異を認めざるを得ないようである。日本海岸の擦文時代の遺跡には、土師器や須恵器が伴出することが多い。和人との交流も他の地域より多かったのであろう。それゆえ……自己の所有する土器の底部に印（“シロシ”）をつけていったのであろうか。」と。

佐藤忠雄は『奥尻町青苗遺跡』（奥尻町教育委員会、1981）の中で台付浅鉢形土器の刻印をまとめている。河野本道による22種分類（「擦文式土器底部の刻印について」『奥尻青苗遺跡一本文編一』1981、未公表）を基礎に新資料を追加してa～iまでの文様分類を行っている。さらに刻印のもつ意味については「アイヌ文化の中で、食器や漆器に彫られた、所有印である『シロシ』や祖系を表現した『イトクパ』に似るが、現段階で刻印とを積極的に結び付ける根拠はない」としている。

擦文文化の刻印記号

河野広道は、自己のフィールドノート『河野広道ノート』の中で刻印土器をまとめていた。宇田川洋はその編集の際に刻印土器という遺物項目を設定して紹介した（『河野広道ノート—考古篇5—』北海道出版企画センター、1984）。小樽市蘭島駅付近出土例（本論第3図99）、奥尻町青苗満徳寺上貝塚の例（第3図114、第4図144・156・161・162、第5図170・174・179・182・183・187・190・196）、余市町フゴッペ洞窟の例（第3図100）、豊富町豊里の例（第1図3～9）が収録されていた。未公表のものが多く含まれていたわけである。

久保泰は、松前町札前遺跡の調査で得られた同種資料をA～Wに分類して報告している（『札前』松前町教育委員会、1985）。+やX形が多いという点は、青苗遺跡と近似し「施文が単純なだけに偶然の一致なのか、これがシロンなのか、エカシ・イトクパを意味するのか興味深いものがある」と述べている。

以上が研究史の概略である。では以下に、遺跡毎の紹介を行うことにする。

第1図～第6図引用文献

- 児玉作左衛門・大場利夫 1959 「天塩国豊富遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』14
宇田川洋編 1984 『河野広道ノート』（考古篇5）北海道出版企画センター
加藤晋平他 1979 『天塩川口遺跡』天塩町教育委員会
宮塚義人 1983 「小平町高砂遺跡の調査」『考古学ジャーナル』213
峰山巖他編 1983 『おびらたかさご』小平町教育委員会・北海道留萌土木現業所
宮塚義人編 1983 『おびらたかさご』小平町教育委員会
福士広志編 1985 『高砂遺跡第2地点発掘調査報告』小平町教育委員会
大場利夫他 1955 『檜山南部の遺跡』上ノ国村教育委員会・江差町教育委員会
其田良雄 1974 『上ノ国町四十九里沢A遺跡発掘報告書』上ノ国町教育委員会
佐藤忠雄編 1981 『奥尻島青苗遺跡』奥尻町教育委員会
桜井清彦 1958 「北海道奥尻島青苗貝塚について（第一次調査概報）」『古代』27
久保 泰 1982 「松前町静浦D遺跡の調査について」『松前藩と松前』松前町
久保 泰他 1985 『札前』松前町教育委員会
田村俊之他 1981 『末広遺跡における考古学的調査（上）』千歳市文化財調査報告書Ⅶ
森田知忠・立川トマス 1982 『美沢川流域の遺跡群Ⅵ』北海道埋蔵文化財センター調査報告8
吉崎昌一・岡田淳子編 1981 『北大構内の遺跡（1）』北海道大学
渡辺俊一 1985 「滝川市出土の土師器器台について」『北海道考古学』21
武田 修 1984 『TKO7遺跡』常呂町教育委員会

3 刻印記号の集成

No.	図	遺跡	遺構	土器 ¹⁾	形態	分類	文献
1	1- 1	豊富町豊里	6号住		高坏	Ⅱ h 1	児玉・大場1959
2	1- 2	豊富町豊里	6号住		高坏	Ⅳ a 1	児玉・大場1959
3	1- 3	豊富町豊里	A号住		高坏	Ⅲ b 2	宇田川編1984
4	1- 4	豊富町豊里	A号住		高坏	I a 5	宇田川編1984
5	1- 5	豊富町豊里	A号住		高坏	Ⅱ b 2	宇田川編1984
6	1- 6	豊富町豊里	A号住		高坏	Ⅱ	宇田川編1984
7	1- 7	豊富町豊里	A号住		高坏	Ⅱ b 9	宇田川編1984
8	1- 8	豊富町豊里			高坏	Ⅱ b 21	宇田川編1984
9	1- 9	豊富町豊里			高坏	I a 5	宇田川編1984
10	1- 10	天塩町川口	2号住		浅鉢	I a 4	加藤他1979
11		羽幌町焼尻					宮塚1983
12		羽幌町チライベツ					宮塚1983
13	1- 11	小平町高砂	AH-59号住		高坏	Ⅱ	峰山他編1983
14	1- 12	小平町高砂	AH-130号住		浅鉢	Ⅱ	宮塚編1983
15	1- 13	小平町高砂	BH-54号住			Ⅱ	峰山他編1983
16	1- 14	小平町高砂	BH-25号住		浅鉢	Ⅱ	峰山他編1983
17	1- 15	小平町高砂	AH-27号住			Ⅱ	峰山他編1983
18	1- 16	小平町高砂	BH-67号住			Ⅱ	峰山他編1983
19	1- 17	小平町高砂	BH-33号住		浅鉢	Ⅱ	峰山他編1983
20	1- 18	小平町高砂	AH-11号住		浅鉢	2)	峰山他編1983
21	1- 19	小平町高砂	AH-39号住		浅鉢	Ⅱ	峰山他編1983
22	1- 20	小平町高砂	AH-29号住		浅鉢	Ⅱ	峰山他編1983
23	1- 21	小平町高砂	AH-1号住		浅鉢	Ⅱ	峰山他編1983
24	1- 22	小平町高砂	AH-113号住		高坏	Ⅱ g 1	宮塚編1983
25	1- 23	小平町高砂	BH-16号住		浅鉢	I a 4	峰山他編1983
26	1- 24	小平町高砂	AH-109号住			I a 4	宮塚編1983
27	1- 25	小平町高砂	AH-39号住		浅鉢	I a 5	宮塚編1983
28	1- 26	小平町高砂	BH-26号住		高坏	I a 5	峰山他編1983
29	1- 27	小平町高砂	AH-39号住			I a 1	小平町教委資料
30	1- 28	小平町高砂	AH-113号住		高坏	Ⅱ b 1	宮塚編1983
31	1- 29	小平町高砂	AH-90号住		高坏	Ⅱ b 2	峰山他編1983

擦文文化の刻印記号

32	1- 30	小平町高砂	AH-89 号住	高坏	II b 2	宮塚編1983
33	1- 31	小平町高砂	AH-39 号住	浅鉢	II b 2	峰山他編1983
34	1- 32	小平町高砂	AP-1土壙	高坏	II b 2	峰山他編1983
35	1- 33	小平町高砂	BH-53 号住	高坏	II b 2	峰山他編1983
36	1- 34	小平町高砂	AH-90 号住	高坏	II b 10	峰山他編1983
37	1- 35	小平町高砂	AH-128号住	高坏	II b 10	宮塚編1983
38	2- 36	小平町高砂	AH-119号住		II a 1	宮塚編1983
39	2- 37	小平町高砂	AH-130号住	浅鉢	II a 1	宮塚編1983
40	2- 38	小平町高砂	AH-24 号住	浅鉢	II a 1	峰山他編1983
41	2- 39	小平町高砂	AH-24 号住	浅鉢	II a 1	峰山他編1983
42	2- 40	小平町高砂	BH-23 号住	浅鉢	II a 2	峰山他編1983
43	2- 41	小平町高砂	AH-91 号住	高坏	II a 2	峰山他編1983
44	2- 42	小平町高砂	BH-57 号住	高坏	II a 2	峰山他編1983
45	2- 43	小平町高砂	AH-130号住	高坏	II a 2	宮塚編1983
46	2- 44	小平町高砂	AH-106号住	高坏	II a 2	宮塚編1983
47	2- 45	小平町高砂	AH-93 号住	高坏	II a 2	峰山他編1983
48	2- 46	小平町高砂	AH-27 号住	浅鉢	II a 3	峰山他編1983
49	2- 47	小平町高砂	AH-56 号住	浅鉢	II a 4	峰山他編1983
50	2- 48	小平町高砂	AH-14 号住	浅鉢	II a 5	峰山他編1983
51	2- 49	小平町高砂	BH-46 号住		II a 6	峰山他編1983
52	2- 50	小平町高砂	AH-99・102号住	浅鉢	II a 5	峰山他編1983
53	2- 51	小平町高砂	AH-99・102号住		II a 6	峰山他編1983
54	2- 52	小平町高砂	AH-60 号住	高坏	II a 8	峰山他編1983
55	2- 53	小平町高砂	AH-93 号住	高坏	II a 8	峰山他編1983
56	2- 54	小平町高砂	AH-119号住	高坏	II a 8	宮塚編1983
57	2- 55	小平町高砂	AH-28 号住	浅鉢	II a 7	峰山他編1983
58	2- 56	小平町高砂	AH-109号住	高坏	II a 9	宮塚編1983
59	2- 57	小平町高砂	AH-78 号住	高坏	II a 7	峰山他編1983
60	2- 58	小平町高砂	AH-109号住	高坏	II a 10	宮塚編1983
61	2- 59	小平町高砂	AH-93 号住	高坏	II a 13	峰山他編1983
62	2- 60	小平町高砂	BH-57 号住	高坏	II a 10	峰山他編1983
63	2- 61	小平町高砂	AH-73 号住	高坏	II a 14	峰山他編1983
64	2- 62	小平町高砂			II b 6	小平町教委資料
65	2- 63	小平町高砂	AH-130号住	高坏	II b 9	宮塚編1983

宇田川 洋

66	2- 64	小平町高砂	AH-75 号住	浅鉢	II b 4	峰山他編1983
67	2- 65	小平町高砂	AH-35 号住	高坏	II b 7	峰山他編1983
68	2- 66	小平町高砂	AH-35 号住	高坏	II b 8	峰山他編1983
69	2- 67	小平町高砂	AH-29 号住	浅鉢	III f 1	峰山他編1983
70	2- 68	小平町高砂	AH-42 号住	浅鉢	III b 4	峰山他編1983
71	2- 69	小平町高砂	AH-37 号住	高坏	III	峰山他編1983
72	2- 70	小平町高砂	AH-42 号住	浅鉢	III b 1	峰山他編1983
73	2- 71	小平町高砂	AH-104号住	高坏	III c 1	宮塚編1983
74	2- 72	小平町高砂	AH-17 号住	高坏	IV b 2	峰山他編1983
75	2- 73	小平町高砂	AH-54 号住		IV b 3	峰山他編1983
76	2- 74	小平町高砂	AH-23 号住	浅鉢	IV	峰山他編1983
77	2- 75	小平町高砂	AH-64 号住	浅鉢	IV b 1	峰山他編1983
78	3- 76	小平町高砂	AH-99・102号住	高坏	II a 18	峰山他編1983
79	3- 77	小平町高砂	AH-112号住	高坏	II a 19	宮塚編1983
80	3- 78	小平町高砂	AH-34 号住	高坏	II a 19	峰山他編1983
81	3- 79	小平町高砂	AH-130号住	高坏	II a 19	宮塚編1983
82	3- 80	小平町高砂	AH-91 号住	高坏	II a 19	峰山他編1983
83	3- 81	小平町高砂	BH-7号住	高坏	II a 20	峰山他編1983
84	3- 82	小平町高砂	AH-54 号住		II a 15	峰山他編1983
85	3- 83	小平町高砂	AH-11 号住	浅鉢	II a 11	峰山他編1983
86	3- 84	小平町高砂	AH-37 号住	高坏	II a 12	峰山他編1983
87	3- 85	小平町高砂	AH-130号住	浅鉢	II b 18	宮塚編1983
88	3- 86	小平町高砂	AH-104号住	高坏	I b 5	宮塚編1983
89	3- 87	小平町高砂	AH-130号住	高坏	II a 20	宮塚編1983
90	3- 88	小平町高砂	AH-130号住	浅鉢	V a 1	宮塚編1983
91	3- 89	小平町高砂	BH-53 号住	高坏	V a 2	峰山他編1983
92	3- 90	小平町高砂	AH-42 号住		I a 1	小平町教委資料
93	3- 91	小平町高砂	AH-24 号住		I a 5	峰山他編1983
94	3- 92	小平町高砂	AH-28 号住		II a 21	小平町教委資料
95	3- 93	小平町高砂	AH-42 号住	浅鉢	II a 17	峰山他編1983
96	3- 94	小平町高砂	AH-42 号住	浅鉢	II a 16	峰山他編1983
97	3- 95	小平町高砂	AH-15 号住	浅鉢	II a 4	峰山他編1983
98	3- 96	小平町高砂	AH-39 号住	浅鉢	II a 15	小平町教委資料
99	3- 97	小平町高砂第2地点	3号住	甕	II	福士編1985

擦文文化の刻印記号

100	3- 98	小平町高砂第2地点 5号住	浅鉢	I a 2	福士編1985
101	3- 99	小樽市蘭島駅付近	土師器 坏	I a 3	宇田川編84 ³⁾
102	3-100	余市町フゴッベ洞窟		III d 1	宇田川編84
103		余市町		II a 12	宮塚1983
104	3-101	江差町法華寺坂	浅鉢	I b 4	大場他1955
105	3-102	乙部町元和8	浅鉢	I a 2	大沼編1977
106	3-103	上ノ国町四十九里沢A	浅鉢	I c 1	其田1974
107	3-104	奥尻町青苗		I	奥尻町教委資料
108	3-105	奥尻町青苗		I	奥尻町教委資料
109	3-106	奥尻町青苗		I	奥尻町教委資料
110	3-107	奥尻町青苗		I b 2	奥尻町教委資料
111	3-108	奥尻町青苗		I b 1	奥尻町教委資料
112	3-109	奥尻町青苗		I b 1	奥尻町教委資料
113	3-110	奥尻町青苗		II	奥尻町教委資料
114	3-111	奥尻町青苗		II	奥尻町教委資料
115	3-112	奥尻町青苗		II	奥尻町教委資料
116	3-113	奥尻町青苗	浅鉢	II	佐藤編1981
117	3-114	奥尻町青苗	浅鉢	II	宇田川編1984
118	3-115	奥尻町青苗		II	奥尻町教委資料
119	4-116	奥尻町青苗	浅鉢	II	佐藤編1981
120	4-117	奥尻町青苗		II	奥尻町教委資料
121	4-118	奥尻町青苗		II	奥尻町教委資料
122	4-119	奥尻町青苗		II	奥尻町教委資料
123	4-120	奥尻町青苗		II	奥尻町教委資料
124	4-121	奥尻町青苗	浅鉢	II	佐藤編1981
125	4-122	奥尻町青苗	浅鉢	II	佐藤編1981
126	4-123	奥尻町青苗	浅鉢	II	佐藤編1981
127	4-124	奥尻町青苗		II	奥尻町教委資料
128	4-125	奥尻町青苗		II	奥尻町教委資料
129	4-126	奥尻町青苗	浅鉢	II	佐藤編1981
130	4-127	奥尻町青苗		II	奥尻町教委資料
131	4-128	奥尻町青苗		II	奥尻町教委資料
132	4-129	奥尻町青苗		II	奥尻町教委資料
133	4-130	奥尻町青苗	浅鉢	II	佐藤編1981

宇田川 洋

134	4-131	奥尻町青苗		Ⅱ	奥尻町教委資料
135	4-132	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ	佐藤編1981
136	4-133	奥尻町青苗		Ⅱ	奥尻町教委資料
137	4-134	奥尻町青苗		Ⅱ	奥尻町教委資料
138	4-135	奥尻町青苗		Ⅱ	奥尻町教委資料
139	4-136	奥尻町青苗		Ⅱ	奥尻町教委資料
140	4-137	奥尻町青苗		Ⅱ	奥尻町教委資料
141	4-138	奥尻町青苗		Ⅱ	奥尻町教委資料
142	4-139	奥尻町青苗		Ⅱ	奥尻町教委資料
143	4-140	奥尻町青苗		Ⅱ	奥尻町教委資料
144	4-141	奥尻町青苗		Ⅱ	奥尻町教委資料
145	4-142	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ	佐藤編1981
146	4-143	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ	佐藤編1981
147	4-144	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ	宇田川編1984
148	4-145	奥尻町青苗		Ⅱ	奥尻町教委資料
149	4-146	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ	佐藤編1981
150	4-147	奥尻町青苗		Ⅱ	奥尻町教委資料
151	4-148	奥尻町青苗		Ⅱ	奥尻町教委資料
152	4-149	奥尻町青苗		Ⅱ	奥尻町教委資料
153	4-150	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ	佐藤編1981
154	4-151	奥尻町青苗		Ⅱ	奥尻町教委資料
155	4-152	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ	佐藤編1981
156	4-153	奥尻町青苗		Ⅱ	奥尻町教委資料
157	4-154	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ	佐藤編1981
158	4-155	奥尻町青苗		Ⅱ	奥尻町教委資料
159	4-156	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ i 1	宇田川編1984
160	4-157	奥尻町青苗		I a 5	奥尻町教委資料
161	4-158	奥尻町青苗		I a 5	奥尻町教委資料
162	4-159	奥尻町青苗		Ⅱ c 1	奥尻町教委資料
163	4-160	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ c 1	佐藤編1981
164	4-161	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ c 1	宇田川編1984
165	4-162	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ c 3	宇田川編1984
166	4-164	奥尻町青苗		Ⅱ c 2	奥尻町教委資料
167	4-165	奥尻町青苗		Ⅱ c 4	奥尻町教委資料

擦文文化の刻印記号

168	4-166	奥尻町青苗		Ⅱ c 5	奥尻町教委資料	
169	4-167	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ b 1	佐藤編1981	
170	5-168	奥尻町青苗		Ⅱ b 1	奥尻町教委資料	
171	5-169	奥尻町青苗		Ⅱ b 1	奥尻町教委資料	
172	5-170	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ b 11	宇田川編1984	
173	5-172	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ b 12	佐藤編1981	
174	5-173	奥尻町青苗		Ⅱ b 12	奥尻町教委資料	
175	5-174	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ b 16	宇田川編1984	
176	5-175	奥尻町青苗		Ⅱ b 16	奥尻町教委資料	
177	5-177	奥尻町青苗		Ⅱ b 16	奥尻町教委資料	
178	5-178	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ b 17	佐藤編1981	
179	5-179	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ b 19	宇田川編1984	
180	5-180	奥尻町青苗		Ⅱ b 20	奥尻町教委資料	
181	5-181	奥尻町青苗		Ⅱ b 1	奥尻町教委資料	
182	5-182	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ b 13	宇田川編1984	
183	5-183	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ b 13	宇田川編1984	
184	5-184	奥尻町青苗		Ⅱ b 13	奥尻町教委資料	
185	5-185	奥尻町青苗		Ⅱ b 13	奥尻町教委資料	
186	5-186	奥尻町青苗		Ⅱ b 13	奥尻町教委資料	
187	5-187	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ b 14	宇田川編1984	
188	5-188	奥尻町青苗		Ⅱ b 15	奥尻町教委資料	
189	5-189	奥尻町青苗		Ⅱ b 15	奥尻町教委資料	
190	5-190	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ b 22	宇田川編1984	
191	5-191	奥尻町青苗	浅鉢	Ⅱ a 21	桜井1958	
192	5-192	奥尻町青苗	浅鉢	I b 2	佐藤編1981	
193	5-193	奥尻町青苗		Ⅲ	奥尻町教委資料	
194	5-194	奥尻町青苗		Ⅲ f 1	奥尻町教委資料	
195	5-195	奥尻町青苗		Ⅲ e 1	奥尻町教委資料	
196	5-196	奥尻町青苗	浅鉢	VIII a 1	宇田川編1984	
197	5-197	奥尻町青苗		Ⅱ b 9	奥尻町教委資料	
198	5-198	奥尻町青苗		Ⅱ b 5	奥尻町教委資料	
199	5-199	奥尻町青苗		I a 5	奥尻町教委資料	
200	5-200	奥尻町青苗	浅鉢	I a 6	佐藤編1981	
201	5-201	松前町静浦D	住居址	浅鉢	Ⅱ b 3	久保1982

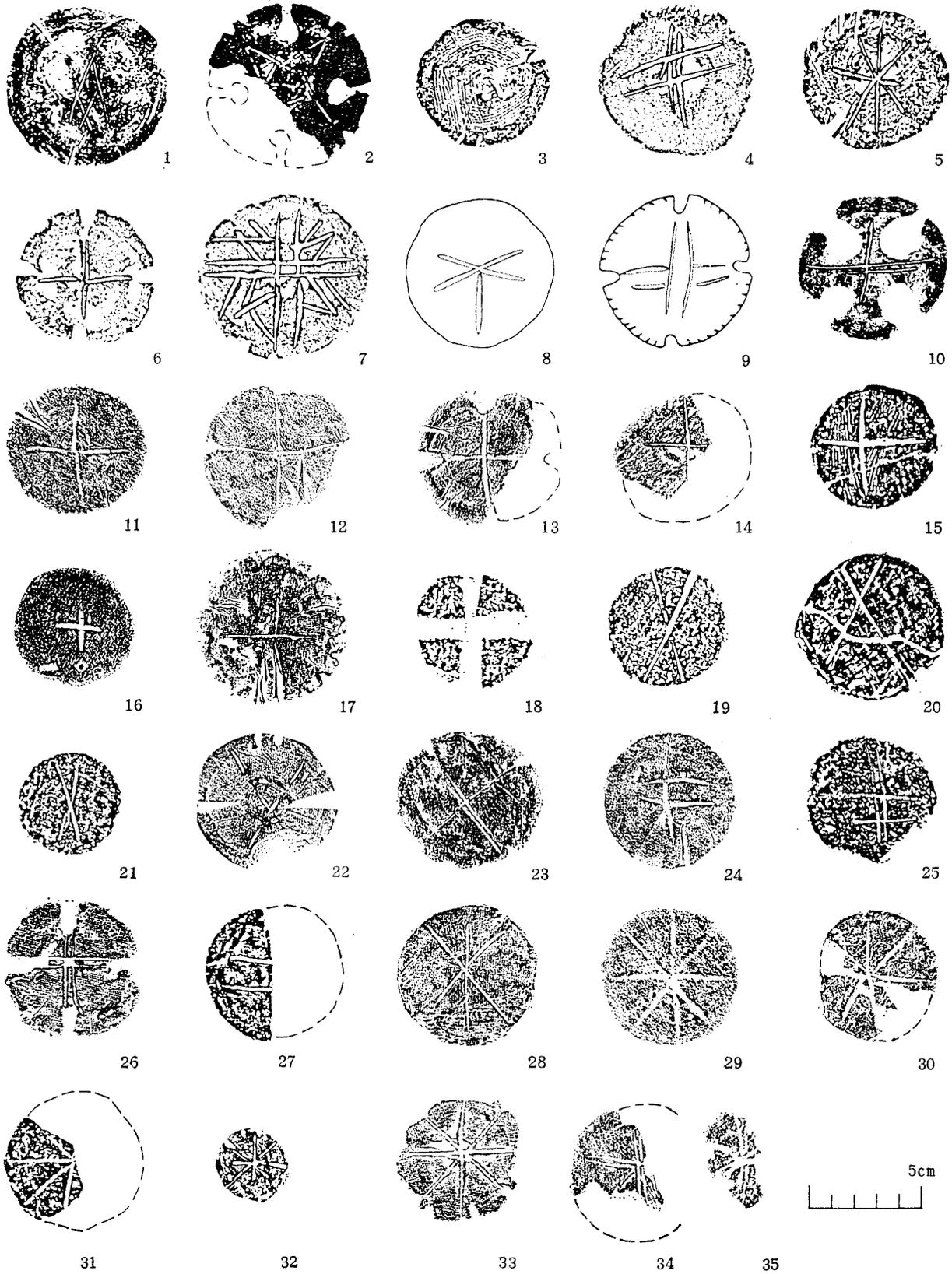
宇田川 洋

202	5-202	松前町静浦D	住居址	浅鉢	Ⅱ b 9	久保1982
203	5-203	松前町静浦D		浅鉢	Ⅱ b 9	久保1982
204	5-204	松前町札前	21号住	浅鉢	Ⅱ	久保他1985
205	5-205	松前町札前	15号住	浅鉢	Ⅱ	久保他1985
206	5-206	松前町札前	21号住	高坏	Ⅱ	久保他1985
207	5-207	松前町札前		高坏	Ⅱ	久保他1985
208	5-208	松前町札前	7号住	浅鉢	Ⅱ	久保他1985
209	5-209	松前町札前		浅鉢	Ⅱ	久保他1985
210	5-210	松前町札前		高坏	Ⅱ	久保他1985
211	5-211	松前町札前	5号住	高坏	Ⅱ	久保他1985
212	5-212	松前町札前	21号住	高坏	Ⅱ	久保他1985
213	5-213	松前町札前	15号住	高坏	Ⅱ	久保他1985
214	5-214	松前町札前		深鉢	Ⅱ	久保他1985
215	6-215	松前町札前		浅鉢	Ⅱ	久保他1985
216	6-216	松前町札前	22号住	浅鉢	Ⅱ	久保他1985
217	6-217	松前町札前		深鉢	Ⅱ	久保他1985
218	6-218	松前町札前	12号住	浅鉢	Ⅱ	久保他1985
219	6-219	松前町札前		浅鉢	Ⅱ	久保他1985
220	6-220	松前町札前	15号住	高坏	Ⅱ	久保他1985
221	6-221	松前町札前	21号住	高坏	Ⅱ	久保他1985
222	6-222	松前町札前		高坏	Ⅱ	久保他1985
223	6-223	松前町札前		高坏	Ⅱ	久保他1985
224	6-224	松前町札前		深鉢	Ⅱ	久保他1985
225	6-225	松前町札前	10号住	浅鉢	Ⅱ b 2	久保他1985
226	6-226	松前町札前		浅鉢	Ⅱ b 2	久保他1985
227	6-227	松前町札前		高坏	Ⅱ b 2	久保他1985
228	6-228	松前町札前		浅鉢	Ⅱ b 1	久保他1985
229	6-229	松前町札前		浅鉢	Ⅱ e 1	久保他1985
230	6-230	松前町札前		浅鉢	Ⅱ b 23	久保他1985
231	6-231	松前町札前	21号住	高坏	Ⅱ f 1	久保他1985
232	6-232	松前町札前	21号住	浅鉢	Ⅲ a 1	久保他1985
233	6-233	松前町札前	15号住	深鉢	Ⅲ b 3	久保他1985
234	6-234	松前町札前	14号住	土師器 坏	Ⅲ b 3	久保他1985
235	6-235	松前町札前	15号住	高坏	Ⅱ d 1	久保他1985

擦文文化の刻印記号

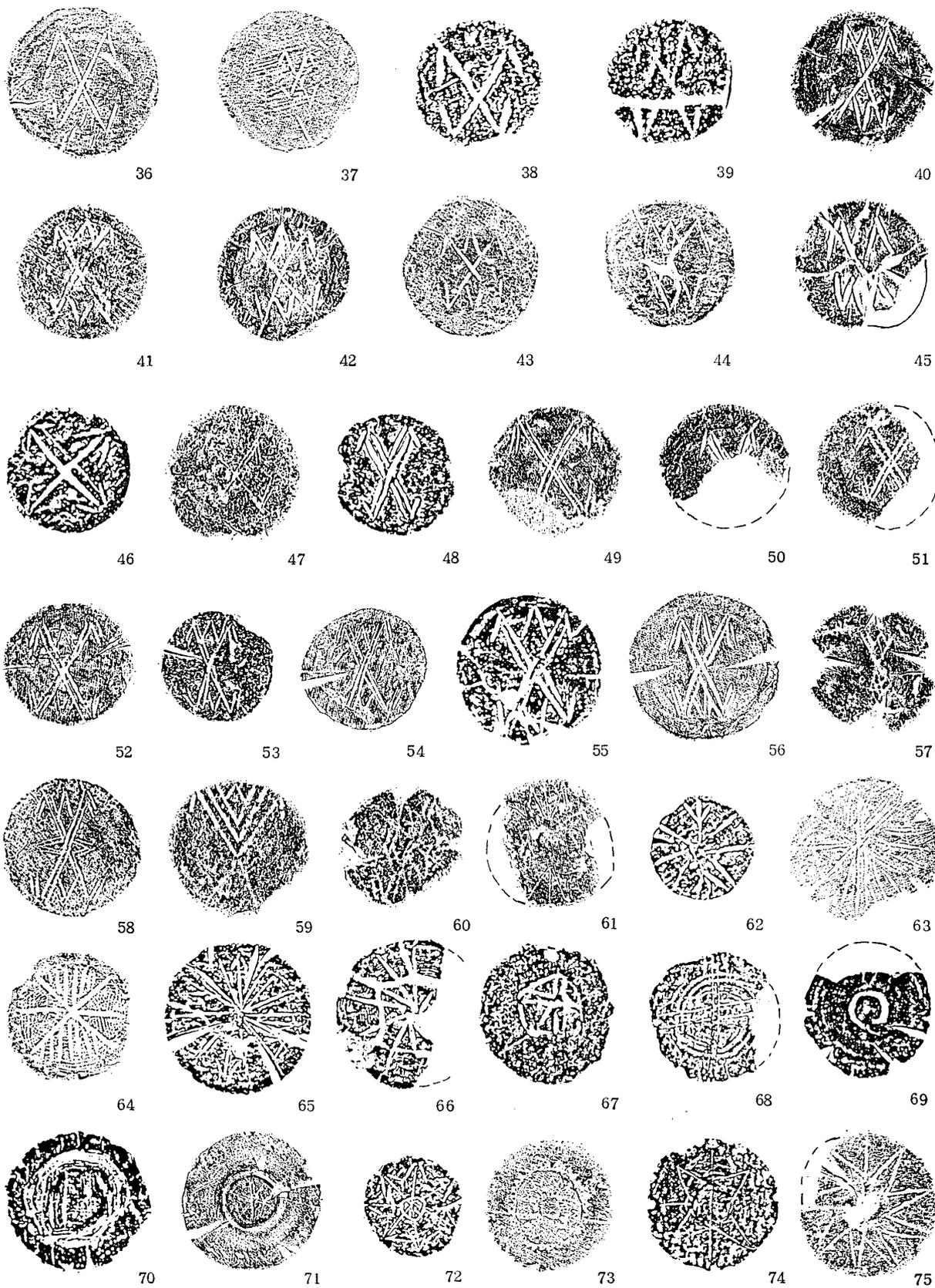
236	6-236	松前町札前	15号住		高坏	Ⅱ d 1	久保他1985
237	6-237	松前町札前	6号住		浅鉢	Ⅱ d 2	久保他1985
238	6-238	松前町札前	8号住		浅鉢	Ⅱ b 1	久保他1985
239	6-239	松前町札前			浅鉢	V	久保他1985
240	6-240	松前町札前	15号住		浅鉢	Ⅲ a 1	久保他1985
241	6-241	松前町札前			高坏	Ⅱ a 17	久保他1985
242	6-242	松前町札前			高坏	Ⅱ a 17	久保他1985
243	6-243	松前町札前	2号焼土		浅鉢	Ⅵ	久保他1985
244	6-244	松前町札前	15号住		浅鉢	Ⅵ	久保他1985
245	6-245	松前町札前			浅鉢	V	久保他1985
246	6-246	松前町札前			高坏	V	久保他1985
247	6-247	松前町札前	16号住		高坏	Ⅱ i 2	久保他1985
248	6-248	松前町札前			浅鉢	Ⅱ i 3	久保他1985
249	6-249	松前町札前			浅鉢	Ⅱ i 3	久保他1985
250	6-250	松前町札前			高坏	Ⅲ	久保他1985
251	6-251	松前町札前			深鉢	I a 7	久保他1985
252	6-252	松前町札前			深鉢	Ⅶ	久保他1985
253	6-253	松前町札前			深鉢	Ⅷ	久保他1985
254	6-254	松前町札前	21号住		浅鉢	I b 3	久保他1985
255	6-255	松前町札前	15号住		浅鉢	Ⅲ a 2	久保他1985
256	6-256	千歳市末広	I H-44 号住		浅鉢	Ⅱ d 3	田村他1981
257	6-257	千歳市末広	I H-73 号住		深鉢	Ⅱ	田村他1981
258	6-258	千歳市美々 8		土師器	坏	Ⅱ	森田・立川1982
259	6-259	札幌市北大構内	1・2号住	土師器	深鉢	I	吉崎・岡田編81
260		滝川市北滝の川		土師器	坏	Ⅱ	渡辺1985
261	6-260	常呂町TK-07	1号住		深鉢	Ⅱ	武田1984
262	6-261	常呂町TK-07	1号住		深鉢	Ⅱ	武田1984

- 註 1) 明記していないものは擦文土器を意味する。須恵器の場合は窯印と思われるので、これに含めない。
 2) 刻印ではなく割り高台とされる。
 3) 縮尺不明。

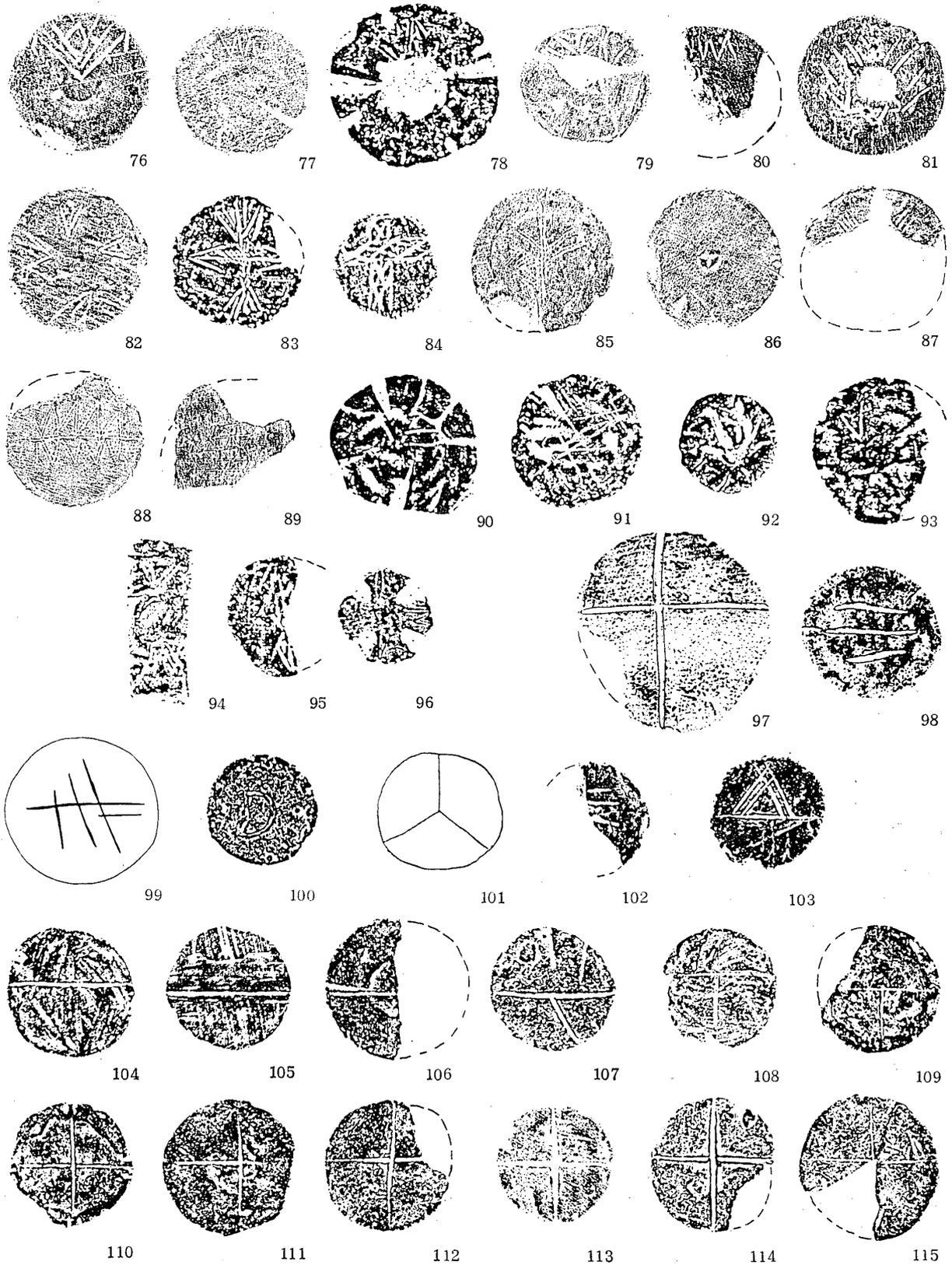


第1図 刻印記号土器(1)

捺文文化の刻印記号

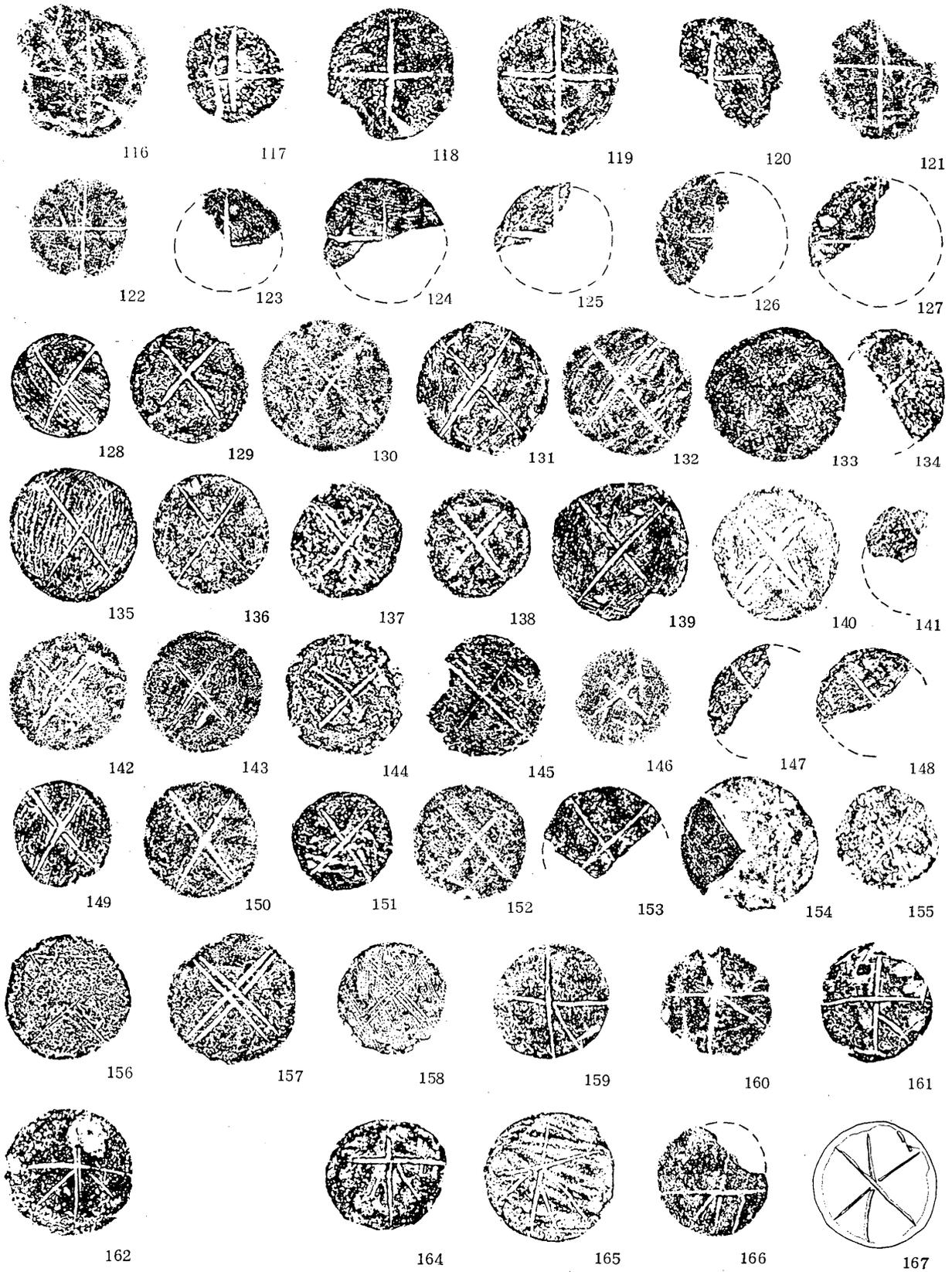


第2図 刻印記号土器(2)

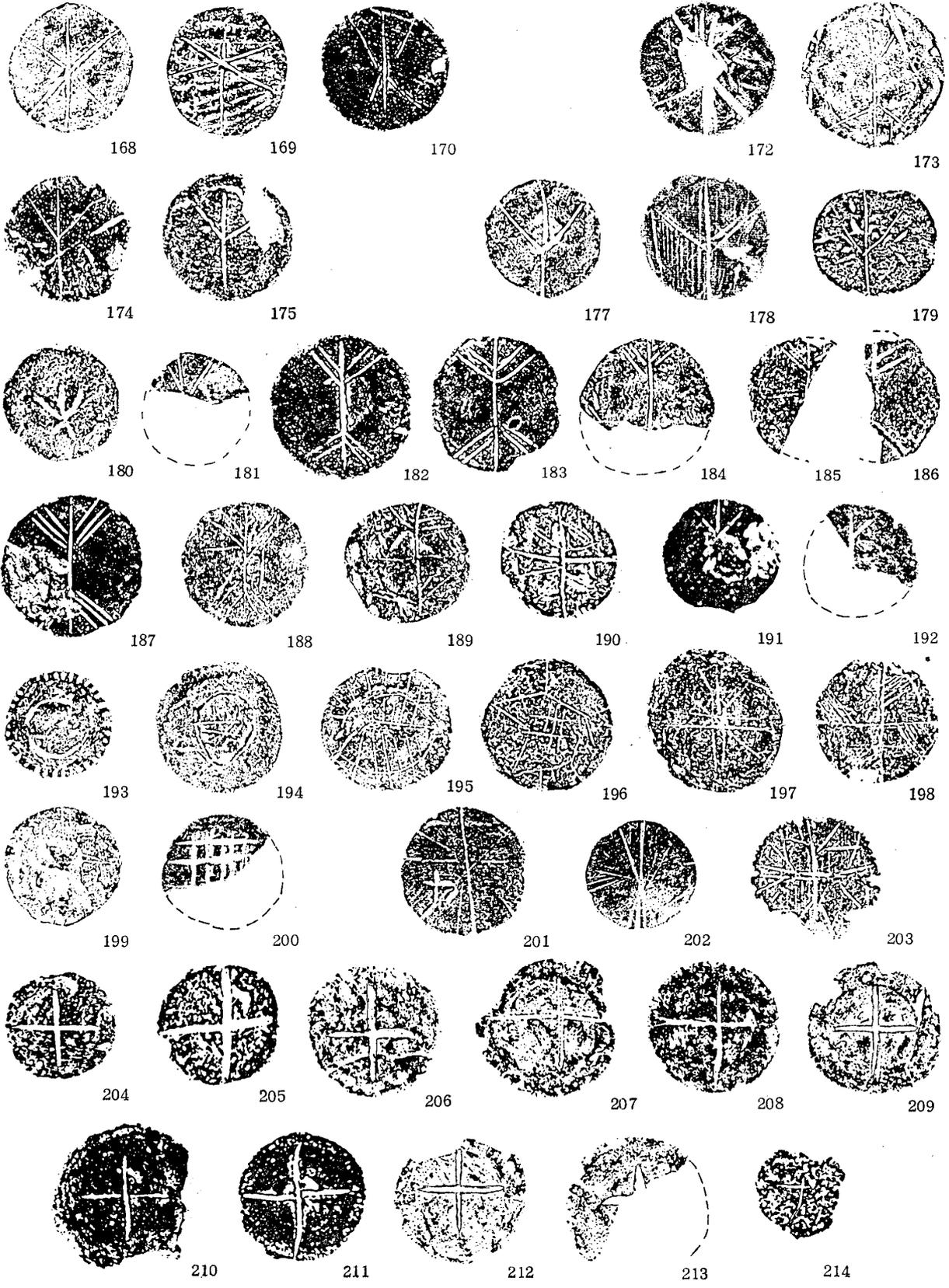


第3図 刻印記号土器(3)

擦文文化の刻印記号

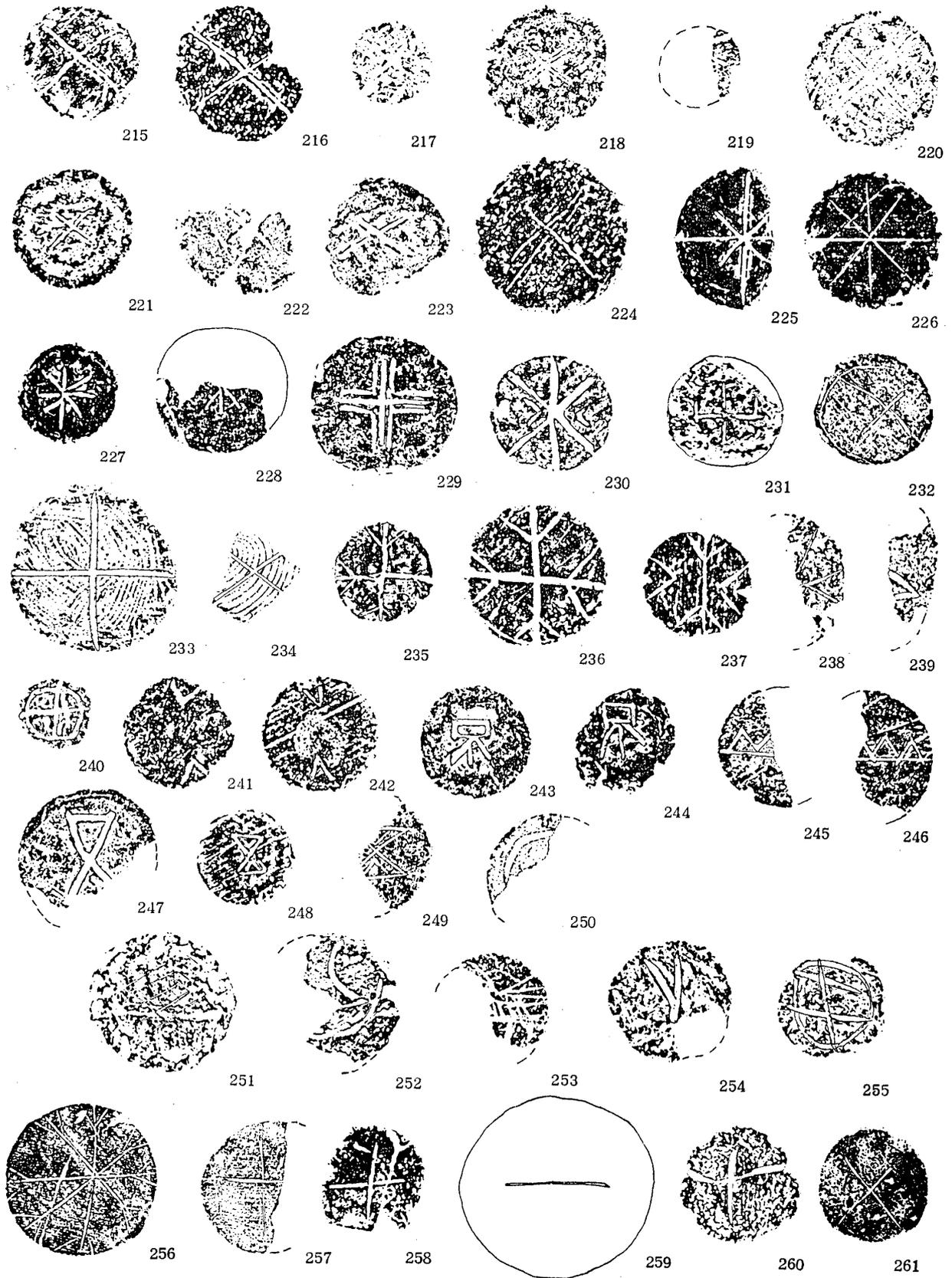


第4図 刻印記号土器(4)



第5図 刻印記号土器 (5)

捺文文化の刻印記号



第6図 刻印記号土器(6)

4 刻印記号の分類

以上が、現在までに知り得た北海道出土の刻印記号の例である。258 例を図示したが、記号の種類がわかる 1 例を加えて、259 例の分類を試みてみよう。第 7 図にそれを示したが、今、仮に文様を単純から複雑へという流れで考えてみる。

I : 一本の直線が基本のもの。

a ~ 二条線になり、さらに三条あるいは直交線を加えて複雑化していく。a 1 ~ a 7 に細分される。

b ~ T 字形になり、それが変形していく。b 1 ~ b 5 に細分。

c ~ 山形が付加された特殊形。c 1 のみ。

II : × もしくは + 形が基本のもの。もっとも多くの変種を有する。

a ~ × 形の先端部に短刻線を加え、さらに二条線へと複雑化していくもの。1 ~ 10 まではスムーズな流れをたどれるが、11 以降は 10 からの逆の簡略化と考えておく。それらは再検討の余地がある。a 1 ~ a 21 まで細分。

b ~ × 形に一条の直線が付加されたものを基本とし、2 以降の × と + の組合せになって複雑化し、× の意義が失われていく系統と、11 以降の次第に × の意義が薄められつつも 15 までの複雑化へと進む系統、16 以降の変形の系統などが多く見られる。b 1 ~ b 23 まで細分。

c ~ 大の字形から木の字形へと複雑化する系統のグループ。c 1 ~ c 5 まで細分。

d ~ + 字形の先端を矢羽根状にしたもの。d 1 ~ d 3 に細分。

e ~ + 字形の外に L 字形を加えたもの。e 1 のみ。

f ~ 卍の変形のようにしたもの。f 1 のみ。

g ~ 短刻線で + 字形にしたもの。g 1 のみ。

h ~ 屋号のように 八 を加えたもの。h 1 のみ。

i ~ + 字形の二つの先端を結び、三角形状にしたものと複雑化したもの。i 1 ~ i 3 に細分。

III : 円形を基本とするもの。

a ~ 円の中に × が加わったもの。a 1 ・ a 2 に分かれる。

b ~ 同心円から渦巻文に変化するもの。b 1 ~ b 4 に細分。

c ~ 円の中に II b 1 の記号が加わったもの。c 1 のみ。

d ~ ローマ字の D のような記号。d 1 のみ。

e ~ 円に放射状に近い短刻線を加えたもの。e 1 のみ。

f ~ 円内に各種の記号状のものを加えたもの。f 1 のみ。

IV : 星形を基本とするもの。

a ~ 星形内に記号を加えるもの。a 1 のみ。

b ~ 星形の先端が外に多く出てくるもの。内部も複雑化する。b 1 ~ b 3 に細分。

V：ジグザグ文を基本とするもの。a 1・a 2あり。

VI：文字状のもの。

VII：弧を組合せたもの。

VIII：絵画的なもの。II a 11・12などもこれに加えるべきかもしれない。a 1あり。

以上の8大別になるが、第7図のように97細分することができる。そして今は前述の通り単純から複雑へを基本にこの分類を考えてみた。しかしそれは、アイヌ社会のエカシ・イトッパと関係があると仮に考えるならば、河野広道⁵⁾のいうように、それらの原形がクマ・シャチ（あるいはイルカ）・トリの三種と見なされるので、逆に具象から抽象（記号化）という流れを想定しなければならぬであろう。しかし現資料では、具象と考えられる絵画的なものはむしろ特殊な存在である。このことについては擦文時代以前の段階ですでに三原形が記号化されたとみることも可能である。いずれ別の機会に再検討してみたいと思う。

5 刻印記号の分類的特性

次に、これらの分類から導かれる特性についてみていくことにしよう。まず、記号の判明している259例を、8分類・97細分項目別にみしてみる。

I群は、Iが4例、a 5が8例、a 4が3例、a 1・a 2・b 1・b 2が各2例、他は各1例である。a類の小計が18例、b類が7例、c類が1例となる。I群の合計は30であるが、それは全体の11.6%に当たる。

II群は、IIが84例、a 2が6例、a 1・a 19が各4例、a 8・a 17が各3例、a 4～a 7・a 10・a 12・a 15・a 20・a 21が各2例、他のa類は各1例である。またb 2が9例、b 1が7例、b 9はヴァリエーションも含めて5例、b 13が5例、b 16が3例、b 10・b 12・b 15が各1例、他のb類は各1例である。c類は、c 1が3例で他は各1例である。d類はd 1が2例で他は各1例、e～h類も各1例、i類はi 3が2例で他は各1例となっている。a類の小計が45、b類が50、c類が7、d類が4、e～h類が各1、i類が4、合計198となる。IIがもっとも多く、II群中の42.4%、全体259のうちの32.4%を占めている。a類とb類も多いほうで、前者はII群中の22.7%、全体の17.3%、同じく後者は25.3%と19.3%である。II群全体は全資料の76.4%と大半を占めていることがわかる。

III群は、全体で16例で6.2%しかないものである。IIIが3例、a 1・b 3・f 1が各2例、他は各1例である。

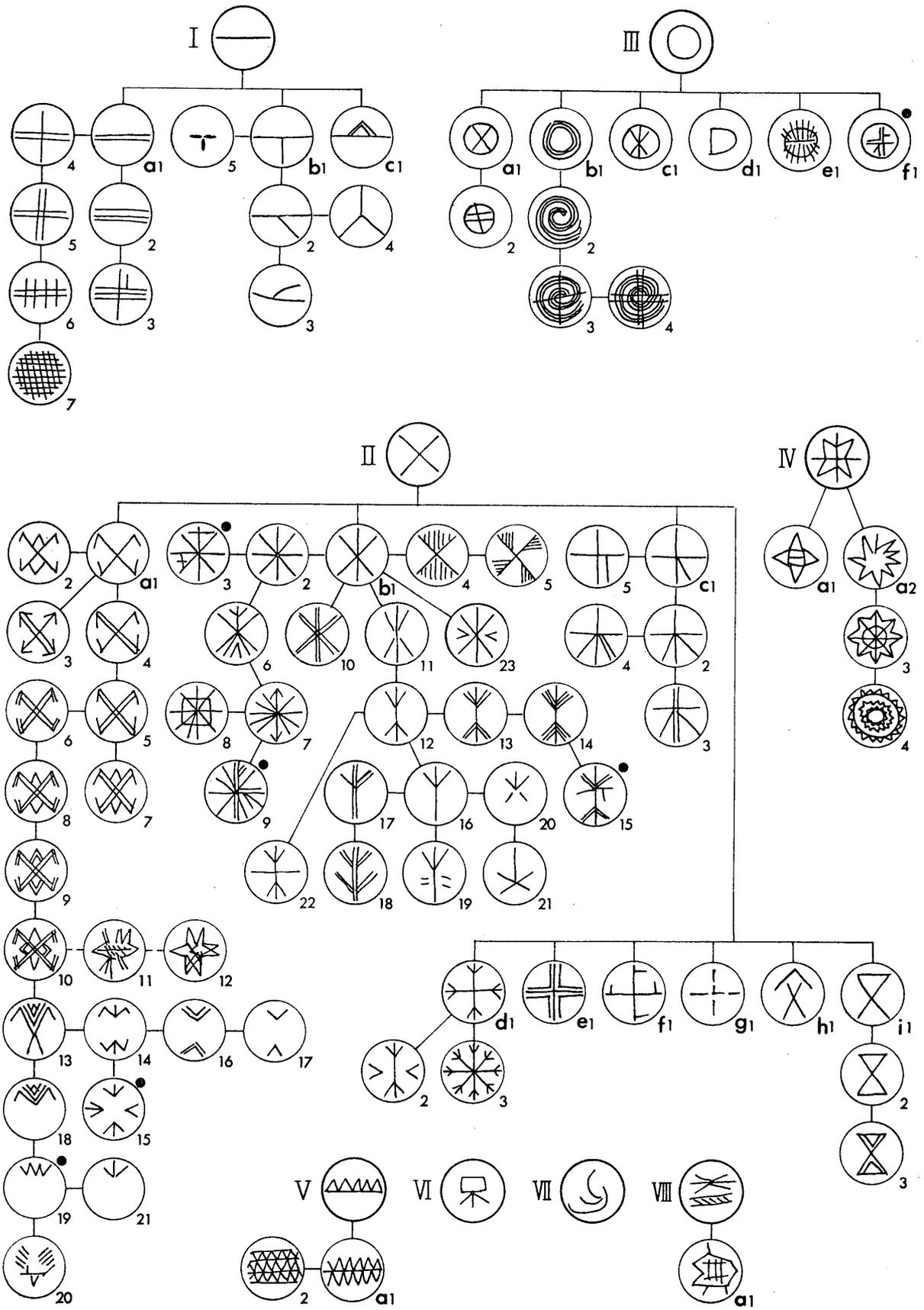
IV群も5例と少ない。全体の1.9%である。各1例ずつである。

V群も5例、1.9%である。Vが3例で、a 1・a 2が各1例だけである。

VI群は2例で、全体の0.8%しかない。

VII群は1例で、0.4%のみである。

VIII群は2例で、やはり0.8%と僅少である。



第7図 刻印記号の分類
(黒丸つきのものはヴァリエーションがあることを示す)

捺文文化の刻印記号

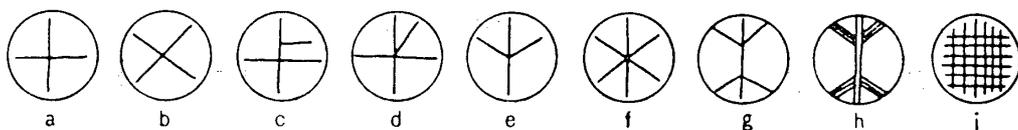
こうしてみると、多い方からⅡ群、Ⅰ群、Ⅲ群の順になり、他はむしろごくわずかで特殊な例と考えてよさそうである。全体からみて、一番多いのはⅡ(32.4%)、Ⅱb(19.3%)、Ⅱa(17.4%)であり、次いでⅠaが7%となっている。すなわち、×記号(Ⅱ)の単純なものとそれにわずかに手を加えたもの(Ⅱa1・Ⅱa2・Ⅱa19・Ⅱb1・Ⅱb2・Ⅱb9・Ⅱb13)などが多くを占めているのである。それらの小計は124例で全体の47.9%となる。約半数近いわけである。次のⅠ、Ⅰa5の小計12例は全体の5%とすでにごく僅少の部類に入るものである。

以上のような出現頻度からみた分類上の特性が指摘できるわけであるが、以下に遺跡毎の刻印記号の類別出現率を検討してみることにする。この刻印記号を有する土器を出土した遺跡は19遺跡が数えられるが、ひじょうに多量に出土した遺跡は、奥尻町青苗貝塚(94点)、小平町高砂遺跡(85点)、松前町札前遺跡(52点)の三遺跡である。次いで多いのは豊富町豊里遺跡(9点)である。今のところ他の15遺跡は多くても3点しか出土していないものばかりである。

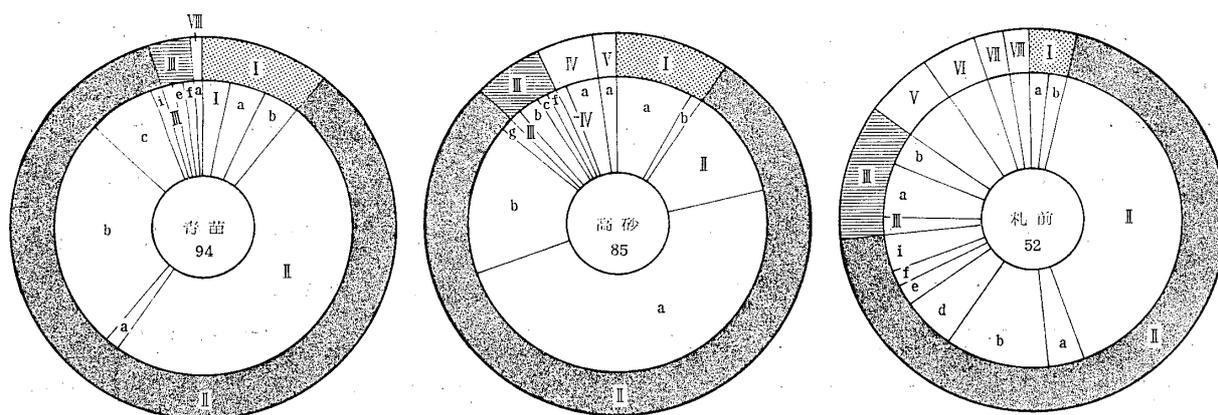
奥尻町青苗貝塚の場合は、Ⅰ・Ⅰa5が各3例、Ⅰb1・Ⅰb2が各2例、Ⅰa6が1例で、Ⅰ群の小計は11で、全体94の11.7%である。もっとも多いのはⅡで46例あり、全体の48.9%を占め約半数である。他はⅡb13が5例、Ⅱb1が4例、Ⅱb16・Ⅱc1が各3例、Ⅱb12・Ⅱb15が各2例、Ⅱa21・Ⅱb5・Ⅱb11・Ⅱb14・Ⅱb17・Ⅱb19・Ⅱb20・Ⅱb22・Ⅱc2～Ⅱc5・Ⅱi1が各1例である。Ⅱ群小計は79で全体の84%である。これは出現率の高さを示す数値といえよう。第9図の出現率グラフを参照されたい。Ⅱが最多であるのはもちろんであるが、Ⅱb類(24例、25.5%)もやや多い傾向があるといえる。他はⅢ・Ⅲe1・Ⅲf1・Ⅷa1が各1例あるだけである。

なお、佐藤忠雄の1980年調査による21例とそれ以前の出土品58例の分析⁶⁾によると、第8図のようにa～iの9種に文様分類されている。

小平町高砂遺跡の場合は、Ⅰa1・Ⅰa4が各2例、Ⅰa5が3例、Ⅰb5が1例で、Ⅰ群の小計は8(9.4%)と少ない。Ⅱ群が主体であるが、Ⅱが10例、Ⅱa2が6例、Ⅱa1・Ⅱa19が各4例、Ⅱa8が3例、Ⅱa4～Ⅱa7・Ⅱa10・Ⅱa15・Ⅱa20が各2例、Ⅱa3・Ⅱa9・Ⅱa11～Ⅱa14・Ⅱa16～Ⅱa18・Ⅱa21が各1例である。このⅡa類は小計41で全体の48.2%と約半数を占めている。本遺跡でもっとも多いグループである。Ⅱb類は、Ⅱb2が5例、Ⅱb10が2例の他、Ⅱb1・Ⅱb4・Ⅱb6～Ⅱb9・Ⅱb18が各1例ある。小計14で16.5%、の数値を示している。他にⅡg1が1例ある。このⅡ群の小計は66で全体の77.6%という多くを占めている。他にはⅢ・Ⅲb1・Ⅲb4・Ⅲc1・Ⅲf1・Ⅳ・Ⅳb1～Ⅳb3・Ⅴa1・Ⅴa2が各1例ある。第9図の出現率グラフでもわかるように、他の二遺跡と比較してⅡaがひじょうに多いという特徴がある。

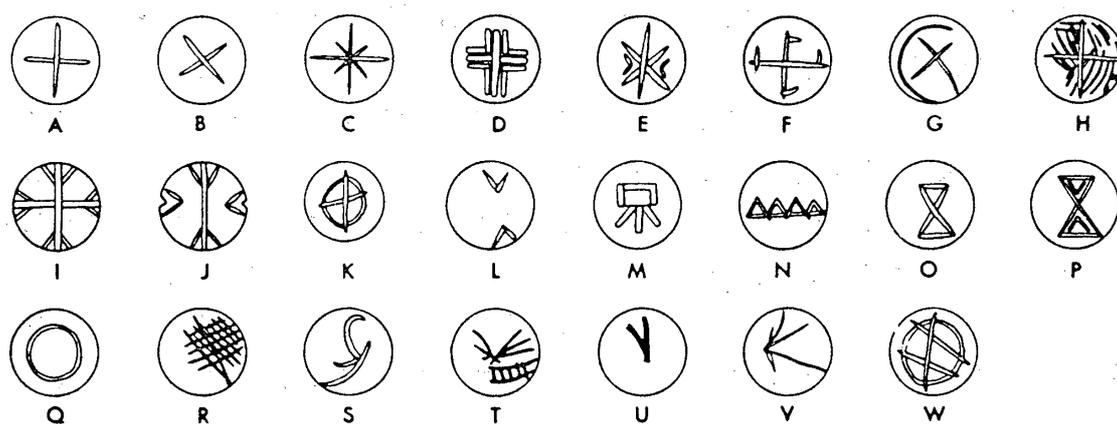


第8図 青苗遺跡での分類



第9図 刻印記号の類別出現率

札前遺跡の場合をみていこう。I群はI a 7・I b 3が各1例の2例のみである。II群がやはり他と同様に主体であるが、中でもIIは21例で全体の40.4%を占めもっとも多いグループである。他はII b 2が3例、II a 17・II b 1・II d 1・II i 3が各2例、II b 23・II d 2・II e 1・II f 1・II i 2が各1例となっている。II群の小計は37で全体の71.2%である。他には、IIIが1例、III a 1・III b 3が各2例、III a 2が1例で、III群の小計は6となる。またVが3例、VIが2例、VII・VIIIが各1例もある。第10図に示したものは、札前遺跡における刻印記号の23分類である⁷⁾。Aタイプ11例、Bタイプ10例で、角度における分類とされるが、「見方によっては判然としないものもいくつかある。」といわれるように、本論ではこれを同一タイプとして扱い、II群の基本形と考えた。そしてさらに「基本的には、A・B両タイプをベースにして変化を見せているようである。」ともいわれる。CがII b 2, DがII e 1, EがII b 23, FがII f 1, IがII d 1, JがII d 2, LがII a 17, OがII i 2, PがII i 3の如くであろう。



第10図 札前遺跡での分類

以上、多くの資料を出土している三遺跡をみてきたが、全資料の出現頻度がII群→I群→III群という順位であることにはほぼ矛盾しない結果といえる(第9図参照)。そして、小平町高砂遺跡に対して道内では南方域に位置する青苗貝塚と札前遺跡の比較的近くの両遺跡を比べてみると、青苗貝

塚では、Ⅱ群・Ⅰ群・Ⅲ群の他にわずかにⅧ群が含まれるだけであるが、札前遺跡では、Ⅱ群・Ⅲ群・Ⅰ群の他にⅠ群より多いⅤ群（ただしⅠ群2例に対しⅤ群3例と僅少である）、そしてⅥ群・Ⅶ群・Ⅷ群とわずかの量ながらヴァリエティーに富んでいるといえる。これも地域的なものようである。

次にこれら三遺跡に共通して多いⅡ群だけを見てみると、Ⅱは高砂10例、青苗46例、札前21例の出土となっている。そしてすでに指摘したように、高砂では66例中の10例であり、他に41例（全体のほぼ半数に近い）のⅡa類が他の二遺跡とは違って多出する傾向を示している。このことは、高砂遺跡が道内の北方域に属するという地域的特性を示しているのかもしれない。ちなみにこの北方域の豊富町豊里遺跡の9例を分析してみると、Ⅱ群は5例であるが、Ⅱa類は出土していない。よってこのことは高砂遺跡だけの特性といえるであろう。このような地域的特性と遺跡毎の特性については、今後の資料増加をまって再検討してみることにしたい。

次に土器の器形別の刻印記号をみておきたいと思う。報告書等から器形が判断できたのは、浅鉢形99、高环形68、坏（土師器）4、深鉢（甕1を含む）12の計183点である。浅鉢形とは、底部に低い台がついたもので、張り出しのないものと若干張り出しても高さが低いものを指して用いた。張り出しのあるものではわずかな揚げ底となることがあるが、それも含めておく。高环形は、脚部がやや高くなり、外への張り出しが強調されているもので、平底の場合も含めておく。环形は土師器の場合に用いておく。ほとんどは平底に近い丸底である。深鉢形はこれら以外のものを指しておく。

浅鉢形土器は器形が判明したもの183点のうち54.1%と半数を越えている。その底面にみられる記号は、Ⅱが30例で、99点中の30.3%を占め、ほぼ1/3に相当する。他はⅡa1・Ⅱb1・Ⅱb2の各3例等があり、ごく少ないものである。1、2例ずつのものでもそれらを加えるとⅡ群の小計は75となり、全体の75.8%を占めている。このデータは全資料の分類結果とほぼ一致するものである。

高环形土器は183点中の37.2%に当たる。やはりⅡが12例と多く、68例のうちの17.6%である。Ⅱb2（6例）、Ⅱa2（5例）、Ⅱa19（4例）もやや多いほうである。そしてⅡ群小計は56で82.4%になる。

土師器にみられる环形土器は4例のみであるが、Ⅱが2例、Ⅰa3・Ⅱb3が各1例である。

深鉢形土器では、Ⅱが7例と多くを占めている。12例中の58.3%である。

以上から、浅鉢形と高环形に刻印記号が多く刻まれることがわかり、その合計は167例で、器形が判明しているもののうちの91.3%と大半を占めている。しかも、記号もⅡが多く、合わせて42例であり、167例中の25.1%である。この両器形の土器が刻印記号を付す基本的なものと考えてよいであろう。ちなみに松前町札前遺跡では、浅鉢形を含む高环形土器158個体のうち45個体に刻印がみられ、出現率28%といわれる⁹⁾。そしてこの45個体は刻印土器52個体のうちの86.5%に相当している。奥尻町青苗遺跡の場合も97例を図示したが、器形不明のものが多いが、同様に大半は浅鉢形と考えてよいであろう⁹⁾。

なお、青苗遺跡においては底面以外の台付浅鉢形土器の胴部にもこの種の刻印記号とまったく同

質の記号が刻まれた例がある¹⁰⁾。それはⅡに入る記号である。同様な例は過去にも青苗貝塚から出土している¹¹⁾。Ⅱ a 21やⅡと同種の記号である。また松前町静浦D遺跡でも、本論第5図202の土器の胴部に縦3本、横2本の「日」の字状に刻んだ記号がみられる¹²⁾。豊富町豊里遺跡の本論第1図9の高環形土器の底部にはⅡ a 17のようなひとつの山形が刻まれている¹³⁾。宮塚義人が扱った奈井江町の資料¹⁴⁾は甕形土器で頸部に刻みがみられるものである。さらに青森県稲崎遺跡の土師器の椀形土器(浅鉢形)の底部近くに、絵画的な記号が焼成後に刻まれたと報告されたものもある¹⁵⁾。以上のような例は、須恵器にみられるいわゆる窯印との関係も考えられるので、ここでは刻印記号としては取り扱わないでおいた。

6 まとめと問題点

以上、北海道出土の擦文文化にみられる刻印記号について考えてみた。ここでまとめをしておこう。

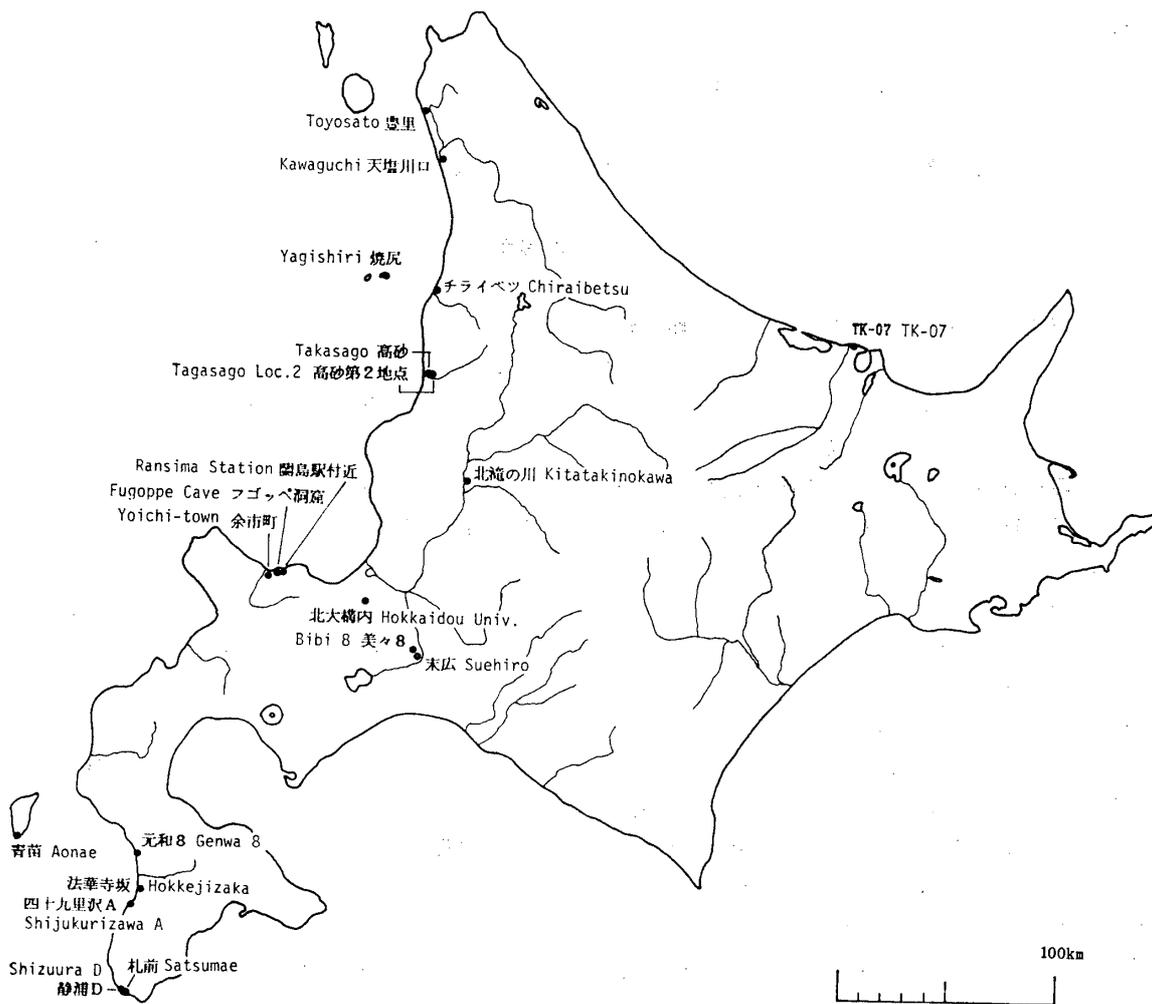
1) 時代的には、小平町高砂遺跡の場合は、筆者の編年¹⁶⁾で擦文中期～後期後半の土器に伴うようである。松前町札前遺跡では11C代～12C後半期¹⁷⁾と推測されている。奥尻町青苗遺跡の場合は、筆者の前期～中期初葉に相当する¹⁸⁾と報告されている。高砂遺跡の場合は問題ないところであるが、後二者の札前・青苗遺跡の類似する資料は、しばしばその編年の位置が問題とされているものである。青苗遺跡では「擦文的でない器形」の無文の壺形土器(P.32 第12図13)があったり、いわゆる複段文様(P.33 第13図24)がみられたりするが、主体を占めるのは頸部に沈線を横位にめぐらす深鉢形土器と同じく頸部に鋸歯状文(列点を有するものもある)を施した深鉢形、そして台付浅鉢形土器である。この浅鉢形土器の文様も鋸歯状文が主である。こうしてみると、主体となっている土器群は、浅鉢形土器の存在からも、擦文前期後半～中期前半くらいに位置づけられるであろう¹⁹⁾。札前遺跡の年代観は、Tm火山灰(苫小牧火山灰)の上層位ということで押えられているが、そのTm火山灰は根本直樹²⁰⁾によって10C中頃を想定されている。千歳市末広遺跡²¹⁾の調査結果でもTm火山灰の上下から擦文土器が出土しているが、その上層出土のものをみると、筆者の擦文中期後半～後期のグループである。これは札前遺跡の年代観とほぼ一致するものである。以上から、刻印記号のみられる擦文土器の年代観は、擦文前期後半～後期後半に位置づけられそうである。9C後半～12Cくらいに相当するであろう。擦文文化の最盛期と換言できるかもしれない。

2) 刻印記号がみられる土器は、今日までの全資料で261例を数えるが、259例を分析した結果、以下のようにみることができる。Ⅰ～Ⅷ群までの8大別と97細別に含まれる。大別でみると、Ⅱ群がもっとも資料数が多く全体の76.4%を占める。次いでⅠ群の11.6%、Ⅲ群の6.2%の順であり、他は特殊な例と考えられるごく少ないグループである。Ⅱ群の中でも細別のⅡが多くⅡ群中で42.4%、全体の32.4%である。こうしてみると、×記号(Ⅱ)が全体の1/3ほどで、それが基本的で、その変形がみられ、次いで一記号(Ⅰ)の変形、○記号(Ⅲ)が加わるという結果が得られる。多くの資料を出土している高砂・青苗・札前の三遺跡を対比してみると、大別ではほぼ共通しているが、北方域の高砂遺跡ではⅡ a類が多出する傾向がみられ、地域的特性を示しているのかもしれない。

い。

3)刻印される器形をみると、浅鉢形土器と高坏形土器に集中しており、全体の90%を越えている。その理由はまだ不明である。

さて、次に問題点を述べておこう。まず、従来から指摘されているように、分布の問題がある。ここで、第11図の道内における刻印記号土器の出土遺跡図を参照されたい。遺跡は南は松前町札前遺跡から始まり、日本海側に北に豊富町豊里遺跡までの海岸線に沿って点在している。内陸部は札幌市・千歳市・滝川市に4遺跡がみられる。そしてそれらは宗谷からえりも岬を結ぶ線の西側に位置し、道西部と考えることができる。これに対して、その東側の道東部では、常呂町TK07遺跡で2例の出土記録があるのみである。しかもその土器は擦文晩期に入る段階のものであり、刻印も浅く不鮮明である。よってこの例は道西部のそれらと同一には扱えないのかもしれない。いずれにせよ、このような道西部の偏在はひじょうに特徴的なありかたである。研究史のところで触れたように、宮塚義人は、この道西部は和人との交流が他の地域より多かったために、自己の所有する“シロシ”をつけたと述べている²²⁾。



第11図 北海道の刻印記号土器出土遺跡

この点については、シベリア大陸の女真文化にみられる「形象刻印記号」との関係が考えられるかもしれないということを前に少し触れたことがある²³⁾。別の機会にその地域の集成も行って再検討してみたいと思う次第である。ちなみに、中国の仰韶文化などにもこの記号と類似のものがみられる。古くは陝西省の西安半坡遺跡²⁴⁾が著名である。最近では同省の元君廟遺跡²⁵⁾や李家溝遺跡²⁶⁾等々でも出土している。それらは後の甲骨文字と結びつけて考えられることが多いようでもある²⁷⁾。また、東周戦国時代（BC 403～221）の広東省四会県龍江公社高地墓²⁸⁾出土の土器底部にみられる刻印、西周春秋時代（BC 770～403）の江蘇省宜興石室墓等²⁹⁾の硬陶土器底部の刻印、西周時代の浙江省衢州市付近³⁰⁾出土の土器底部の刻印なども注意する必要がある。

なお、青森市石上神社遺跡においてもⅡ a 22のヴァリエーションと考えられる刻印記号をもつ土器が1点出土している（青森県立郷土館所蔵）。これらの点についても問題点として残しておき、別の機会にまとめてみる所存である。本論をまとめるに当たって、河野本道氏・福士広志氏・小平町教育委員会にお世話になったことを記しておく。（1986.1）

註

- 1) 藤本 強 1972 常呂川下流域の擦文土器について、常呂, 407-433, 同 1977 (続) 常呂川下流域の擦文土器について (Ⅰ), 岐阜第三遺跡, 133-137, 同 1980 (続) 常呂川下流域の擦文土器について (Ⅱ), ライトコロ川口遺跡, 119-127, 同 1985 (続) 常呂川下流域の擦文土器について (Ⅲ), 栄浦第一遺跡, 311-317.
- 2) 平光吾一 1930 アイヌ彫刻「イトッパ」の土器表面文様としての存在に就いて, 人類学雑誌 45-2, 79-86.
- 3) 河野広道 1933 樺太の旅 (Ⅰ), 人類学雑誌 48-3, 156-163.
- 4) 渡辺 仁 1972 アイヌ文化の成立, 考古学雑誌 58-3, 47-64.
- 5) 河野広道 1936 アイヌとトーテム的遺風, 民族学研究 2-2 (『河野広道著作集Ⅰ』北海道出版企画センター, 1972, 184-192 所収)。
- 6) 佐藤忠雄編 1981 奥尻島青苗遺跡, 奥尻町教育委員会 (P. 65 第30図)。
- 7) 久保 泰他 1985 札前, 松前町教育委員会 (P. 188 第164図)。
- 8) 註7)と同じ (P. 242)。
- 9) 河野本道氏の御教示による。なお, 第3図104～第5図200までの拓影図のうち, 奥尻町教委資料としたものは同氏の資料提供によるものである。また, 小平町高砂遺跡の拓影図は, 報告書からの引用ではなく, 小平町教育委員会の資料提供によるものである。
- 10) 註6)文献 (P. 34 第14図)。
- 11) 桜井清彦 1958 北海道奥尻島青苗貝塚について, 古代 27 (P. 3 第5図2), 宇田川洋編 1984 河野広道ノート (考古篇 5) (P. 153 第44図4)。
- 12) 久保 泰 1982 松前町静浦D遺跡の調査について, 松前藩と松前 19 (P. 12 第7図2)。
- 13) 註11)宇田川文献 (P. 155 第47図2)。
- 14) 宮塚義人 1983 小平町高砂遺跡の調査, 考古学ジャーナル 213 (P. 15 第4図13)。
- 15) 江坂輝弥 1953 青森県下北半島稲崎遺跡調査報告, 古代 12 (P. 20 第3図9)。
- 16) 宇田川洋 1980 擦文文化, 北海道考古学講座, みやま書房, 151-182。
- 17) 註7)文献 (P. 242)。

擦文文化の刻印記号

- 18) 註6)文献 (P.71)。
- 19) 宇田川洋 1980 アイヌ考古学(教育社)の中で、青苗貝塚出土の擦文土器を併出する内耳土器との関係から晩期としておいた(P.41)がなお一考を要する。
- 20) 根本直樹 1985 火山灰を視点とする擦文式土器編年の一試案, 北海道考古学21, 27-59。
- 21) 大谷敏三・田村俊之 1981・1982 末広遺跡における考古学的調査(上)・(下), 千歳市文化財調査報告書Ⅶ・Ⅷ。
- 22) 註14)文献 (P.16)。
- 23) 宇田川洋 1984 大昔の北海道, 北海道出版企画センター, 207-212。
- 24) 西安半坡博物館 1963 西安半坡。
- 25) 北京大学歴史系考古教研室 1984 元君廟仰韶墓地。
- 26) 西安半坡博物館 1984 銅川李家溝新石器時代遺址発掘報告, 考古と文物1984-1。
- 27) 土谷昭重 1984 北海道の古代にト骨法はあったか, 北海道の文化51, 53-78。
- 28) 何紀生 1985 広東発現的几座東周墓葬, 考古1984-4。
- 29) 鎮江博物館 1983 江蘇武進・宜興石室墓, 文物1983-11。
- 30) 衢州市文物管理委員会 1984 浙江衢州市発現原始青瓷, 考古1984-2。

The Incised Mark of Satsumon Culture

Hiroshi UTAGAWA

1 Preface

There are many incised marks on the under-surface of the bottom of Satsumon Pottery in Hokkaido, and it has been said by scholars since long ago that the mark resembles the so-called *itokpa* or *ekashi-shiroshi* or *ekashi-itokpa* carving of Aynu material culture. The *itokpa* or *shiroshi* occasionally refers to an individual person's mark, and it is also said that it means the ancestor's mark or sign on rare occasion in Aynu society.

The potteries with this incised mark number 261 and they were discovered in twenty sites in Hokkaido (Fig. 11). I was able to obtain a total of 259 marks (Figs. 1-6). The sites are as follows.

- Toyosato site in Toyotomi-town (1-9, Fig. 1)
- Kawaguchi site in Teshio-town (10, Fig. 1)
- Takasago site in Obira-town (11-96, Figs. 1-3)
- Takasago site Loc. 2 in Obira-town (97, 98, Fig. 3)
- neighborhood of Ranshima Station in Otaru-city (99, Fig. 3)
- Fugoppe Cave site in Yoichi-town (100, Fig. 3)
- Hokkejizaka site in Esashi-town (101, Fig. 3)
- Genwa 8 site in Otobe-town (102, Fig. 3)
- Shijukurizawa A site in Kaminokuni-town (103, Fig. 3)
- Aonae site in Okushiri-town (104-200, Figs. 3-5)
- Shizuura site Loc. D in Matsumae-town (201-203, Fig. 5)
- Satsumae site in Matsumae-town (204-255, Figs. 5-6)
- Suehiro site in Chitose-city (256, 257, Fig. 6)
- Bibi 8 site in Chitose-city (258, Fig. 6)
- Hokkaido University site in Sapporo-city (259, Fig. 6)
- TK-07 site in Tokoro-town (260, 261, Fig. 6)

In this paper, I intend to first discuss the incised mark and then classify and analyse it.

2 Classification and analysis of incised marks

In classifying the 259 marks, I hypothetically considered changes from simple to complex. Thus, these marks were classified roughly into 8 groups, and subdivided into 97 types (Fig. 7).

Group I

Type I : one straight line mark.

Type Ia : two straight lines or three lines and added cross line at right angles; these are subdivided into a1-a7 types.

Type Ib : mark “T” and its variants, with b1-b5 subdivision types.

Type Ic : added “^” mark, c1 type only.

Group II

Type II : mark “×” or “+”.

Type IIa : added a short incision on the tip of lines and further complexity, subdivided into a1-a21 types.

Type IIb : added one straight line to “×” and its variants, subdivided into b1-b23 types.

Type IIc : “大”, “木” mark and their variants, c1-c5 types included.

Type IId : added arrowhead-like incision on the tip of “+” mark, d1-d3 types included.

Type IIE : added “L” mark outside “+”, e1 type only.

Type IIf : variant of “卍”-like mark, f1 type only.

Type IIg : “+” mark by short incision, g1 type only.

Type IIh : added “^” mark, h1 type only.

Type Iii : triangle mark and its variant, subdivided into i1-i3 types.

Group III

Type III : circle mark.

Type IIIa : added “×” mark in a circle, subdivided into a1 and a2 types.

Type IIIb : variants from concentric circle to scrolled pattern, subdivided into b1-b4 types.

Type IIIc : added IIb1 mark in a circle, c1 type only.

Type IIId : “D”-like mark, d1 type only.

Type IIIe : added radiating short lines, e1 type only.

Type IIIf : added various marks like a circle, f1 and its variation types.

Group IV

Type IV : star mark.

Type IVa : added mark of a star, a1 type only.

Type IVb : having several tips of a star, subdivided into b1-b3 types.

Group V : zigzag pattern, subdivided into a1 and a2 types.

Group VI : Old Japanese or Chinese letter-like pattern.

Group VII : complicated circular arcs.

Group VIII : picture-like patterns and variations.

There are 30 items in Group I, accounting for 11.6% of the total, including 18 items Ia-type, 7 items Ib-type and so on. In Ia-type, Ia5 is the most numerous, having 8 items. There are 198 items in Group II, occupying 76.4% of the total. In this Group II, II-type having 84 items is especially large. These make up 42.4% of Group II and 32.4% of the total. Group III has 16 items, or 6.2% of the total. Group IV having 5 items is scarce, and it is only 1.9% of the total. Group V is also small. Groups VI and VIII each having 2 items, account for 0.8% each. Group VII has only 1 item and represents 0.4%.

Numerous potteries with the incised marks have been excavated in the following three sites: Aonae site (94 items), Takasago site (85 items) and Satsumae site (52 items); Toyosato site has only 9 items.

At Aonae site, II-type including 46 items is the largest, and accounts for 48.9% of the total in this site. Group II has 79 items, and occupies 84%. Group I has 11 items, representing 11.7%. Figure 8 provides the classification of these marks as reported by Sato et al. (1981). They are classified from a-type to i-type.

In the case of Takasago site, Group II with 66 items (77.6%) is the largest as it is in the other two sites. In Group II, IIa-type with 41 items (48.2%) is the largest as compared with other sites.

At Satsumae site, the II-type with 21 items is the largest and represents 40.4% of the total. It is shown in Fig. 10 in the report on this site and it is classified into 23 groups from A-type to W-type (Kubo et al. 1985).

On the whole in these three sites, the results obtained showed no contradiction to the order of the frequency of appearance of all the materials, i. e. Group II, Group I and Group III. But it is recognized that between Takasago site situated in the northern part of Hokkaido and both Aonae site and Satsumae site placed in the southern part of Hokkaido, there are

only few differences, i. e. at Takasago site, IIa-type is the largest. This is possibly due to the regional differences. It is shown in Fig. 9.

Next, I consider the shape of potteries. There are 183 potteries which can be distinguished clearly. These consist of 99 shallow bowls (*asabachi-gata*), 68 bowls with stands (*takatsuki-gata*), 4 plates of Hajiki with semi-rounded bottoms (*tsuki-gata*) and 12 pots (*fukabachi-gata*).

Shallow bowls are 54.1% in total and include 75 items of Group II mark (75.8%). The bowls with stands are 37.2% in total, include 56 items of Group II (82.4%). The plates and pots are rare. From the results of the above analysis, the majority of marks are incised on the under-surface of bottoms of shallow bowls and the bowls with stands. The frequency of appearance of all the shapes is 91.3% (167 items). Besides, the marks of II-type, of which are 42 items, (25.1% of 167) are the largest. Therefore, it is understood that both shallow bowls and bowls with stands are the basic shapes with the incising mark.

3 Problems

First of all, we are interested in chronology. In the case of Takasago site, it is reported by Miyatsuka (1983) that the potteries belong to a period from the middle stage to the latter half of the late stage of Satsumon culture of the author's chronology (Utagawa 1980). This may be from the 10th century to the 12th century A. D.. Concerning Aonae site, Sato(1981) reported that the age of the potteries discovered in this site date to a period from the latter half of the early stage to the first half of the middle stage, which perhaps corresponds with the age from the latter half of the 9th century to the first half of the 10th century A. D.. Kubo (1985) reported that the potteries at Satsumae site were found over the layer of Tomakomai volcanic ash (Tm-volcanic ash). It has been suggested that the age of the ash layer may be about the 10th century (Nemoto 1985). In the case of another site, Suehiro site in Chitose-city, the Satsmon potteries discovered over the Tm-volcanic ash belong to a period from the latter half of the middle stage to the late stage of Satsumon culture.

Hence, it may be suggested that the age of potteries with the incised mark belong to a period from the latter half of the early stage to the latter half of the late one of Satsumon culture. It is possible to say that the height of the prosperity stage of Satsumon culture was roughly between the latter half of the 9th century and the 11th century.

There is another problem concerning the distribution of these marks. Almost all the sites are located along the coastline of the Sea of Japan. Only 4 sites are situated inland. But they existed in the western part, too. Thus it can be said that the locations have an

uneven distribution in the western part of Hokkaido (Fig. 11). In the eastern part, very few marked potteries (2 items at TK-07 site in Tokoro-town) exist. They are included in the last stage of Satsumon culture, which is different from others in age. Anyway, the uneven distribution is an interesting problem. Earlier I have referred to this problem (Utagawa 1984), suggesting that it may have something to do with the incised mark on the potteries of Jurchen culture in Siberia. Also, in China, similar marks are found in Yangshao culture. I intend to touch upon these questions in a future paper.

literature

KUBO, Yasushi et al. 1985 Satsumae., Matsumae-town Board of Education.

NEMOTO, Naoki 1985 An Analysis of the Chronology of Satsumon Pottery by Volcanic Ash., Hokkaido Kokogaku 21.

MIYATSUKA, Yoshito 1983 The Excavation at Takasago Site in Obira-town., Archaeological Journal 213.

SATO, Tadao et al. 1981 Aonae Site in Okushiri Island., Okushiri-town Board of Education.

UTAGAWA, Hiroshi 1980 Satsumon Culture., Hokkaido Archaeological Lecture., Miyama-shobo.

UTAGAWA, Hiroshi 1984 Ancient Hokkaido., Hokkaido Shuppan Kikaku Center.